

国立がん研究センター

世界をリードする研究の力で 「がんに負けない国へ。」



国立がん研究センター
理事長
研究所長
間野博行 氏

国立がん研究センターは1962年の開設以来、60年以上にわたり日本のがん対策を牽引し、がん研究・がん医療をリードし続けている。同センター理事長に就任し、より良いがん医療の実現を目指す間野博行氏に話を聞いた。

日本に新薬が届かない 「ドラッグロス」の深刻化

海外では使える新しいがん治療薬が、日本に届かない――。

「海外で開発された新薬が日本で使えるようになるまで時間がかかる『ドラッグラグ』のみならず、日本にそもそも新薬が入ってこない『ドラッグロス』が年々深刻になってきています」

国立がん研究センターの理事長・研究所長の間野博行氏は、現状に強い危機感を表した。

なぜ、有望な新薬が日本を素通りしてしまうのか。間野氏はその原因が「創薬の主役の交代」にあると指摘する。「現在、医薬品の多くは米国のスタートアップ企業で開発され、大手製薬会社から収められてから大規模な臨床試験を行う流れになってい

ます。しかし米国スタートアップは臨床試験の計画を立てる際に、そもそも日本を視野に入れておらず、新薬開発から抜け落ちてしまっているのです。今、その影響が大きく出ています」

世界が目指す 創薬インフラを整備

この状況を打破するため、国立がん研究センターでは、海外の創薬企業にとって魅力的な創薬インフラ整備を進めている。その一つが、患者のがん組織を移植した「PDXマウス」のライブラリー構築である。PDXマウスとは生きた腫瘍バンクであり、新薬の効果を予測するうえでシャーレ上の細胞株に比べて格段に精度を高めることができる。創薬企業にとっては創薬成功率を高める重要な開発資源といえる。

「国立がん研究センターには、実際の患者さんの治療歴などとリンクした約700種類もの高

精度なライブラリーが構築されています。これは他の追従を許さないレベルです」と間野氏。

この貴重な武器を生かすには、海外の創薬企業に直接働きかけるアウトリーチ活動が欠かせない。ここで大きな力となるのが「寄付」だ。

「お寄せいただいた資金は、日本の魅力を世界の創薬企業に知らしめ、未来を担う研究者育成の基盤となります。世界の先端医療を日本の患者さんに届け、さらに日本から世界へ革新的医療を発信していくうえで、頼もしい支援となります」

一人ひとりの寄付が、がんになっても治療の希望を持てる社会への、確かな一歩となる。

お問い合わせ



国立がん研究センター基金
The National Cancer Center Foundation

国立がん研究センター
築地キャンパス 寄付係
☎03-3547-5333
メール: ncckifu@ncc.go.jp



国立がん研究センター
柏キャンパス 寄付係
☎04-7133-1111 (内線91460)
メール: kifu@east.ncc.go.jp